造形活動における描画材料についての考察
―日本画材による絵画表現と技法について―

A Study of Painting Materials in a Formative Activity
: The pictorial representation and the technique in Japanese painting materials

若　山　　哲
Tetsu Wakayama

キーワード：絵画技法　描画材料　制作プロセス　図画工作

1．はじめに

幼児期における造形活動や小学校における図画工作は子ども達の豊かな情操や感性を育むために重要である。小学校学習指導要領[1]によれば、教科としての図画工作は、「表現及び鑑賞の活動を通して、感性を働かせながら、つくりだす喜びを味わうようにするとともに、造形的な創造活動の基礎的な能力を培い、豊かな情操を養う」ことを目的としており、意欲や喜びを感じとれる内容が求められている。

筆者の勤務校において、保育者、教育者を目指す学生を対象に、図画工作についての簡単な意識調査を行うと、例年一定の割合で、「苦手である」または「嫌いである」という回答がある。美術や図画工作について苦手意識を感じる学生が一定数いるのは致し方ないことではあるが、将来様々な形で造形活動を支援する立場になる際には、指導に必要な知識や技術の習得以上に創造することを楽しむ感性が重要である。保育士・幼稚園教諭・小学校教諭の養成における造形指導の課題として、美術、図画工作について苦手意識を持った学生に対して、苦手意識を払拭し、興味を持って取り組むことができる指導内容の構築が挙げられる。

先に触れた授業初回の意識調査は、授業を円滑に運営する目的で行っており詳しくデータを分析したものではないが、学生の回答の中に興味深いものとして、「絵は苦手であるが、工作は好き」といった回答が見られる。その回答からは「図画＝描く事」と「工作＝造る事」を別のものと考えていることが読み取れる。本来、図画工作、美術というのは様々な造形表現を包括しているわけで、学習主体が、図画工作、美術について「造形的な創造活動」として捉えていれば、得手不得手の感じ方の相違はあっても、絵を描く、工作をするという事を、個別に好きや嫌いと感じることはない。おそらく意識調査において「工作は好きだったが、絵を描くのは苦手」と答える学生は発想や技術において得意不得意という意味でそういった回答をおこなっていると推察されるが、絵画制作は「描く」という意識だけではなく「造る」という意識を持つことが重要であると考える。絵を描く際に「造る」という感覚を持ち、「造形的な創造活動」と捉えられることができれば、学生の描画活動に対する苦手意識を払拭できるのではないかと考える。

制作活動においての意識の在り様は作り手それぞれによって異なるが、本研究では、日本画材による絵画制作における自身の制作過程について振り返ることで、その制作過程で「描く」「造る」ということについて、どのような意識が働いているかについて明確にし、描画活動を「造形的な創造活動」として捉えるために必要な、造形素材の提示・テーマとなる題材の提示・制作プロセスについて考察する。図画工作の授業実践を通して苦手意識を払拭し、創造的表現に主体的に取り組むために、必要となる配慮や指導内容について提案

を行いたいと考える。

２．制作プロセス

絵画における制作プロセスとは本来段階が明確に分かれたものではないが、今回、自身の制作過程について振り返るにあたり、制作過程を構想と制作１～６の７つの段階に分類して考察していく。

構想：作品制作を行う場合、自身の抽象的イメージを頼りに落書きのように、エスキースを繰り返す。近年は、風景を題材に制作をしているが、特定の風景を描くのではなく、記憶を頼りに、普段見かける様々な風景からイメージを構築していく。なるべく多くのエスキースを行いながら、徐々にイメージを絞り込んでいく。複数のエスキースから実際に制作の骨組みとなる構図を決める。この段階では大まかな骨組みは決めるが、あまり厳密に構図を決めすぎないように注意する。ある程度、基本となる構図が決まってきたところで、色やマチエルについてイメージを作っていくが、その際にどこに絵具を厚く塗るか、どこを紙の表情を活かすかについても、計画を立てていく。おおよそではあるが、制作１～３ぐらいまでの工程についてはエスキースの段階で決めておく。（写真１）

写真１：エスキース

制作１：エスキースを参考にアタリをとる。最初に画面全体を意識して、かなり薄めた薄墨でアタリをとっていく。アタリをとる際には、あまり神経質にならないようにし、エスキースで決めた構図と違いについては拘りすぎないようにする。最初は乾くのを待ちながら、形の確認を行っていく。２回３回とアタリを入れる中で徐々に形を決めていく。実際の大きさでアタリをとってみると、エスキースの段階では気にならなかったところが気になってくるが、それらはその時々の画面と相談しながら仕事を進めていく。アタリをとる際には、基本的には乾くのを待ちながら形を入れていくが、ある程度骨格ができてきたら、霧吹き等でぼかしを入れたり、濡れている状態で画面を傾けたりするなどして、意図した以外の形や表情も出てくるようにする。（写真２）

写真２：制作１アタリをとった段階

制作２：大まかな形が決まったら、イメージにそって顔料で色彩を決めていく。比較的粒子の粗い顔料を使用し全体に絵具を置く。７番から９番ぐらいの比較的粒子の粗い顔料を中心に使用し、ざっくりと絵具を置いていく。この時、同時に画面上での絵具の厚みの強弱を意識する。今回は画面上部と中央左付近に厚みを置き、画面下部では麻紙の表情を活かしながら仕事を進めている。思い通りにいくとは限らないが、後で塗り重ねた表情や、絵具を落とす時の事を考えながら、絵具を置いていく。彩色を重ねていき、ある程度の顔料が画面に乗ってきたら、細かな表情を描き起こす。描き起こすと表情が浮いて来たり、部分的に抵抗感がなくなったりしてくるので、必要に応じて部分的に潰

したりしながら描き進める。エスキースで予定していた形や構成がある程度決まってきたら、一度最終的なイメージに合わせるように、粒子の細かい顔料を全体に掛ける。あまり無計画にやりすぎてもいけないが、なるべくおおらかに仕事をするよう心掛ける。（写真３）

写真３：制作２の段階

制作３：顔料を重ねていく。その際、絵具の厚みの差を意識し、場所によっては麻紙の表情を潰しすぎないよう注意する。何回か顔料を重ねたら、複数の粒子を混ぜた顔料を使い、意識的に盛り上げながら彩色をし、画面における絵具の厚みの差を強調していく。最終的なイメージに沿って絵具を重ねていくが、現時点での画面のまとまりについてはあまり意識しないようにする。おおよその形や色調が決まってきた所で、不必要な絵具を60℃ぐらいの温水で洗う。支持体を寝かせたまま洗う場合もあるが、今回は流れた絵具の表情が出るよう少し傾けた状態で洗う。一度、画面を洗った状態から、再び形を起こす。描き進めるうちにできた表情や形を、部分的に生かしながら手を入れていく。（写真４）

写真４：制作３で画面を洗った状態

制作４：洗う・描き起こす・潰すを、繰り返しながら、最終的な明暗のバランスや、塗り重ねたときのイメージを意識しながら色彩を置いていく。それまで最初に計画したように制作を進めていくのではなく、この段階では、それまでの表現と異なり最初に描こうとイメージした絵を目指して描き進めるというより、できてきた画面と相談しながら仕事をしている。

写真５：制作４の段階

制作５：思ったような効果はなかなか現れないが、画面と対話をしながら、形を起こしたり潰したりを繰り返す。この段階では構図や色彩などについて決まってくるが、細部の表情にとらわれすぎないように留意しながらも、偶然できたマチエルやにじみなど必要なものを活かすように仕事をしていく。大きな仕事と細かな仕事を交互に繰り返し、場合によっては再び温水を使い、乗せすぎた顔料を落としていく。

写真６：制作５の段階

制作６（完成）：絵の構造や色彩については固まってきて、あまり大胆な仕事はしなくなる。神経質になりすぎるのもよくないが、バランスを取りながら描き進めていき、ある程度納得したところで完成とする。

写真７：完成図

写真８：完成（部分図）

３．考察

制作過程においては様々な意識を持って制作を行っているが、今回の絵画制作について振り返ってみたときに、意識の在り方について以下の４点にまとめてみた。

A：形・空間・質感を描こうとする意識
B：絵画を物質として捉えようとする意識
C：イメージしたものを造ろうとする意識
D：偶発性に任せる意識

上記の４つの意識はＡの意識が絵画の中身を描こうとする意識なのに対し、Ｂは絵画を物質として見る意識である。また、Ｃはイメージ通りのものを造ろうとしているのに対し、Ｄでは予想外のものができることを期待しているといったように、それぞれ全く違う性質を持っている。

A～Dについて制作過程に沿って確認してみると、以下のようになる。

制作プロセスのエスキースの段階では、A：画面の中に何らかの形や空間、質感を描くという事を意識し、構図や形について大まかに決めていく。その際にも漠然とではあるが、顔料の粒子や絵の具の厚みをどこに着けていくかなど、完成を予想しながらどのような質感の表現にするか考えており、B：絵画を物質として意識し、その物質としての質を造ることについても意識を働かせている。

制作に入ると、アタリをとる段階や、制作２で、下地の色を置いている段階ではA：主に形や構成を意識して、仕事を進めているが、制作３や制作４の段階においてB：物質としての質を意識した仕事が多くみられる。特に制作４の段階においては、顔料を乗せる、落とすという事を繰り返すことで、偶発的な効果を意識しながら、画面に何らかの質感を表現しようとしている。また制作２までの段階ではエスキースの段階で考えていたC：「こんな絵にしよう」という意識をもって制作しており、制作３や制作４ではD：逆に描きこんだ表情を潰す、絵具を洗うなど、という事を行うことで、偶発性を意識しながら描きすすめている。制作５から完成までの段階では、完成に向けての微妙な表情に拘りながらの仕事が中心になり、偶発性に任せる意識での仕事はほとんどなくなるが、絵の骨格は大きく変化することはないが、A：形・空間・質感を描こうとする意識、B：絵画を物質として捉えようとする意識、C：イメージしたものを造ろうとする意識のそれぞれの意識から作品を見つめて、完成に向けて仕事を進めていった。

このことからA～Dの４つの意識は、全く別の意識でありながら、それぞれが複雑に絡み合い制作を行っていることが分かる。自身の作品において、この４つの意識を軸として制作を推し進めることから、それぞれの意識は描画活動において必要不可欠な要素であると考える。

本研究の課題である、学習主体が描画活動を「造形的な創造活動」として捉えるためには、描画活動においてこれら４つの意識を持つことが重要であると考えるが、A：形・空間・質感を描こうとする意識とC：イメージしたものを造ろうとする意識については、描画活動を行う際のもっともポピュラーな意識で自然に意識されるものと考えられるが、B：絵画を物質として捉えようとする意識やD：偶発性に任せる意識については、意識しにくいものではないかと推察される。A・Cの意識については、あまり強くそのことを意識することで「上手に描けない」「イメージ通りにできない」という苦手意識を助長することが考えられるため、指導の際にはA・Cについて意識させすぎないことが望ましいと考える。それに対して、B・Dについては学習主体にとって意識にくいことと考えられる。B・Dについて意識するためには、実際にどのような造形素材の提示・テーマとなる題材の提示・制作プロセスが必要かについて考察を行う。

最初にB：絵画を物質として捉えようとする意識であるが、今回、自身の制作の際に、なぜ絵画を物質として捉えようとする意識が働くかについて考察していくと、２つの理由が挙げられる。１つは、自身の作品が写実的な具象絵画でないことということで、仮に写実的な作品を目指していた場合には「画面の質」ではなく、モチーフの質感や表情、量感や空間を表現しようとすることで、結果的に画面を一つの空間としての質を造ろうとしたと考えられる。

もう１点は、日本画材による制作であることが挙げられる。日本画制作の場合、彩色の際、接着力を持たない顔料を展色材である膠と混ぜることから制作を行

う。ある意味では絵具を造ることから制作が始まっているといえるが、そのことが彩色の際に顔料を支持体に接着する、ということを強く意識させていると考える。その物質を物質に接着させるという感覚は、筆やペンで「描く」ということよりは、何かを貼りあわせる「造る」という意識である。

描画活動における意識の持ち方は当然作り手それぞれにより違うわけだが、下記に挙げる画題（テーマ設定）と素材（描画材料の種類）によって、学習主体が描画活動をB：絵画を物質として捉えようとする意識として捉えられるのではないかと考える。

画題（テーマ）については写生や友人の顔など具体的なモチーフを見て描く活動ではなく、「未来の家」や、「夢の世界」など空想の世界や、「土」「水」「空」などの形をどの様にでも捉えることができる課題などが考えられる。

つぎに描画材についてだが、先に述べたように、日本画材は自身で顔料と膠（展色材）を混ぜることで、素材を強く意識するが、その制作手順の複雑さや、制作に必要な時間の長さから、子どもの描画活動には適していない。実際に子どもを対象とした制作活動を行う際に描画素材を意識しやすいものとして、フィンガーペインティング、コラージュ、砂絵、などが挙げられる。

表１にまとめたようにこれらの事を意識した課題設定を行うことで、子どもたちの描画活動において「造る」という意識を持つことができるのではないかと考える。

つぎにD：偶発性に任せる意識であるが、描画活動では「何かを描こう」とするのが自然でありC：イメージしたものを造ろうとする意識を持ちやすいわけだが、そのためその逆の意識である偶然性に任せる意識は芽生えにくい。

自身の制作において、このD：偶発性に任せる意識は非常に重要なものである。日本画材はアクリル絵の具や水彩絵の具に比べて扱いが難しく、意図したとおりの色や表現をするためにはある程度の経験が必要である。逆にいえば想像もしなかった色、マチエルを造ることが容易で、イメージを超えた作品に仕上がることもある。描画活動において「イメージしたものを造る」「予想外のものができる」というのは相反するものではあるが、どちらも大切なものである。

実際に学習主体と描画活動を行う際には何かを描こう・作ろうと投げかけるわけだが、その場合、学習主体は当然、見たものやイメージを持ち何かを描こう・造ろうとする。そのため、描画活動を行う際にD：偶発性に任せる意識を持つためには、「何を描こう・作ろう」という前段階として、豊かな素材体験が不可欠である。小学校学習指導要領では「材料を基に造形遊

表１．B：絵画を物質として捉えようとする意識を持ちやすいと考える課題

画題(テーマ)	「未来の家」「夢の世界」などの空想の世界 「土」「水」「空」など不定型な物
描画材・技法	フィンガーペインティング　コラージュ　アッサンブラージュ 砂絵　デカルコマニー

表２．描画活動における意識とその留意点

描画活動における意識	指導の際の留意点
A：形・空間・質感を描こうとする意識	描画活動において自然に考えることであり、指導者は必要以上にそのことについて求めない。
B：絵画を物質として捉えようとする意識	画題：空想や不定型な物を扱うことで写実に捉われすぎないようにする。 描画材：素材を意識しやすいようコラージュや、砂絵など様々な素材を扱う。
C：イメージしたものを造ろうとする意識	描画活動において自然に考えることであり、指導者は必要以上にそのことについて求めない。
D：偶発性に任せる意識	素材体験を十分に行うことで、素材の持つ様々な可能性について体験する。

びをする」と示しているが、指導者は何かを造らせようとする前に、十分な材料との関わりに留意することが重要である。何かを描くための道具としてではなく、絵具やクレヨン、パス、紙、のりやハサミで何ができるのかという体験をすることで「予想外のものができた面白さ」を十分に経験する事が大切であると考える。

描画活動において学習主体に意識してほしいこととそのための留意点について下記にまとめた。

４．まとめ

一般に子どもの描画活動は、クレヨン、サインペン、水彩絵の具など扱いが容易な材料を使用することから始まる。描画活動の発達段階は１～３歳児におけるスクリブル表現から２～４歳に象徴的表現、３～５歳頃に前図式期、４～９歳に図式期、９～11歳に初期写実期、11～13歳に擬写実期と移行する。スクリブルによる表現は色がつく、線が引けることを楽しんでいる状態であるが、それ以降は発達段階に応じて、「何かを描く」という事が描画活動の主眼となっていき、色がつく、線が引けるということについて、それがどういった現象であるかについて意識を働かせる機会がないまま、小学校中高学年で写実期を迎える。大橋[2]によると、このころになると「描きたいもの」と「描けるもの」の差異を感じ、自信や興味の喪失へと繋がっていくと考えられるという。そのため図画工作に対する苦手意識を持ちやすい写実期の指導が重要であると考えるが、その際の留意点として、先に挙げたテーマ設定・描画材料の選択・材料体験が重要である。子どもの描画活動は「見たもの又はイメージしたものを描く」という意識でおこなっており、「線が引ける、色がつく」という事について、それらの現象が実際には、物質と物質を張り合わせているということを意識しないでいる。そのことを理解することで、描画活動への意識が変化するのではないかと考える。

本研究では描画活動における意識の在り様について考察し、描画活動をより豊かなものとするための描画材料・題材設定・留意点について研究を行なった。しかしながら、授業の際に個々の学生から聞き取りをすると、苦手意識の理由は、「上手にできない」「発想力がない」「人と比べてしまう」など多様である。課題設定により、ある程度は苦手意識を払拭できると考えるが、教員養成校での造形指導においては、個々の苦手意識に寄り添った指導が重要であると考える。

１　小学校学習指導要領解説図画工作編：文部科学省，2008年８月
２　美術教育概論：日本文教出版，2010年８月，PP.20